若者よ! 世界にでよう!

ドイツ日記

～その9：これから留学を目指す方々へ～

ドイツ連邦
物理工学研究所
山口敦史
Atsushi Yamaguchi

およそ2年にわたった私のドイツ滞在も、いよいよ終わりが近づいてきました。帰国準備に追われながら、この記事を書いています。最終回の今回は、私の2年間の体験に基づいて①ドイツの研究スタイル、②ドイツでの博士号の価値、そして③ドイツで学んだ教育の重要性について御紹介します。

ドイツの研究スタイル

1

ドイツと日本の研究スタイルの違いを一言で言い表すなら「分業スタイルのドイツ」と「一人でなんでもやってしまう日本」でしょう。例えば私が日本で実験していたときには、電子回路が必要ならば、CADで回路図を描き、基板作成器で基板を用意し、そこに素子をはんだ付けする、といった作業を全て自分でやっていました。プログラムが必要なら、自分でプログラムを書き、真空チャンバが必要ならチャンバを組み立ててベイキングしていました。ちょっとした金属パーツが必要なら、フライス盤やボール盤を使って自分で金属加工をしていました。一方ドイツでは（少なくとも私の職場では）、電子回路、プログラミング、金属加工、それぞれに担当のプロがいます。したがって、そういう作業はそれぞれのプロに任せて、研究者は自分の担当である「研究」に専念しなさい、という完全な分業スタイルでした。

どちらのスタイルが研究に適しているかは、一概には言えません。ドイツスタイルは一見すばらしく見えるかもしれませんが、たとえ一人でもまともに作業のできない「プロ」がいたとすると、

途端に破綻します。しかし、各作業の担当者全員が真のプロであった場合には、間違いなく非常に強力な研究体制です。したがってドイツの中でも一流の大学や研究機関では、それぞれの分業チームに対して余すことなく優秀な人材を確保することに多大な労力を費やしているように見受けられました。

博士号の価値

2

次に、博士号の価値の違いについて御紹介しましょう。ドイツでは博士号を持っているということが、アカデミックの世界ではもちろん、日常生活の中でも非常に敬意を持って扱われます。例えば、私はインターネット通販で娘のベビー用品を何度か購入しているのですが、最初のユーザ登録でDr.かそうでないかを聞かれました。そのため、今でもベビー用品やそのカタログがDr. Yamaguchiというあて名で届きます。最近、部屋の退去でいろいろとやり取りをしている不動産業者も、私へのメールにはDr. Yamaguchiというあて名を使ってくれます。ドイツ鉄道で切符を買っても、あて名はDr. Yamaguchiです。また、例えば実験で使う道具を購入する際、見積もりを業者に頼むとしましょう。研究目的のような小口注文の場合、学生が見積もり依頼を出しても相手にされないことがよくあります。そのような場合、博士号を持った研究者が代わりに見積もりを取ります。それは、Dr.のタイトルを持った研究者が見積もりを依頼した途端、手のひらを返したようにすぐに見積書を送ってくれるからです。

なぜ日本とドイツで、一般社会の中での博士号の価値がこれほど違うのでしょうか。私は、博士号を持った人と日常生活で接する機会が多いか少ないかが原因ではないかと思っています。日本では民間企業が博士号取得者をほとんど採用しないため、必然的に博士という人種の人々は大学や研究機関などのアカデミックな場にしかいません。すると、アカデミックな場と関わりのないほとんどの人々にとっては、博士号を持った人と言われても余り具体的にイメージできず、敬意も持ちようがないのではないかと思います。日本の場合は、むしろ出身大学の方が具体的にイメージしやすいステータスになっているように思えます。しかし、博士号は「オリジナリティがあり、かつ価値のある研究を行った」証であり、卒業した大学よりもずっと重要な指標ではないかと思うのです。なぜ企業が博士号取得者を採用しないのか、というのはここで考えるには大きすぎるテーマなので割愛しますが、日本の民間企業にはもっと積極的に博士号取得者を採用して頂き、いつかは出身大学よりも博士号の有無がステータスとなるような社会になってほしいと個人的には思っています。

ドイツの教育

3

教育の重要性というのもこの2年間で私がドイツで学んだことの一つです。ドイツは先進国と呼ぶにふさわしい非常に成熟した国ですが、その社会を実現するのに根本的な役割を果たしている要因は、充実した教育だと私は考えています。これはアカデミックな意味での教育に限ったことではありません。このドイツ日記でも紹介しましたが、例えばドイツ人の驚くべき親切さは、元をたどれば家庭での親の教育、小学校・中学校などでの教育の充実ぶりを反映しているといえるでしょう。また、ドイツの政局・経済がこれほど安定なのは、よく教育された賢い国民が、適切な為政者若しくはリーダーを選び、そうして選ばれた人が政治・経済の様々な局面で賢い行動を取っているからと

言えるでしょう。

充実した教育はまた、私たち一人一人が幸せな人生を送るためにも重要なのだということをドイツは教えてくれました。あるとき職場でドイツ人の同僚と雑談していたときのことです。「幸せな人生とは、一体どんなものだろうか？」という話題になりました。ドイツ人の同僚は、いろいろな物事に自発的に好奇心を持ちかつそれについて自由に思索ができる人生、言うならば「知的に自立した人生こそが幸せな人生だ」、という意見でした。そして知的に自立するには、基礎体力を付けるために十分な教育を受けることが重要だということです。私はこの意見がとても好きで、今でも大事にしている考え方の一つです。

このように教育は、一般社会から個人の幸せまで全ての根幹に関わる最も重要な要素なのだとすることを私はドイツで学びました。もし将来、日本で教育に携わる機会があれば、今度は若い方々にこのドイツで学んだ教育の重要性を伝えたいと思います。

若者よ、世界に出よう！

4

さて、最初にも書きましたが、今回でこのドイツ日記はおしまいです。大学を卒業したときには、まさか自分がドイツで2年間も生活し、ましてやそこで娘を授かるなどとは考えてもいませんでした。人生何があるか本当に分かりません。しかし、ドイツで過ごしたこの2年間はとても有意義で密度の濃い時間でした。もし留学を迷っている若い方々がいらっしゃったら、私は自信を持って「世界に出よう！」とアドバイスします。海外では普通に生活しているだけでも、経験したことのない出来事に毎日のように遭遇します。そしてそのような経験は、私たちの物事に対する視野を格段に広げてくれます。このドイツ日記が、世界への一歩を踏み出そうとしている若い方々の背中をそつと後押しする役割を果たせたとしたら、これ以上の喜びはありません。